

Vol.1

美しく作られるよう作られたものは美しいに決まっている。美しくないだろう不完全なものを美しく感じる事こそ、遊び心であり、純粹であり、飽きのない興味であり、真の美しさである。

私の心はいつも、そうした不完全な喜びに溢れている。

言葉は音符であり、解釈であり、分析である。音は抽象であり、想像であり、心である。

はずれたところに、いつも心の扉は待っている。

2020年 10月22日 近江楽堂

工藤 煉山

## 1. Prologue

いつものはじまり。

## 2. 本手の調 Honte no Shirabe

生命は息し、それは無から一瞬に解き放たれ放出し、やがて終焉を迎える。

無は次のはじまり。生命力に溢れ、命を凝縮している。

この一連の流れは、地球が生を終えるまで無常に繰り返される。

人間はありとあらゆる死から目を背ける。

恐怖は極端に萎縮され、小さな個人の枠組みを形成し、そして全てを盲目にする。

万物の過程は人間が考えている以上に、美しく、幸福に満ちている。

## 3. 虚空 Koku

人は意識する。何故、意識するのか。

自我。他人。社会。環境。あるいは人生の意義。

それは生に執着する心の顕。

様々は知っている。意識は浅はかで、都合がよく、とても儂い。

手に溜められた一掬いの水に自分を映すようなものであると。

時間と空間の支配の顕。

一心は、それを淘汰する。

#### 4. 手向 Tamuke

いつからだろう、手を手と合わせる行為をするようになったのは。  
この国は、常に自分の中の心を向き合う心を大切にしている。  
私はそうした、ほのかな感覚が好きである。

手向る事は遥かに多くを伝えられる。

数えきれない程の別れは、数えきれない程の感謝に繋がる。

私はいつも心に手向たい。

#### 5. 別伝 鹿の遠音 Shika no Tone

言葉でない伝え方ができるとしたら、  
私たちの生き方はどうなるのだろう。

嬉しい時、怒った時、おかしい時。

動物からすると、人間の伝え方はどう感じるのだろう。

不自由、虚、無感情。

野生は心に溢れいている。

#### 6. 龍聲 Ryusei 工藤煉山 作曲

龍の夢を見た。

龍は目で語る。

ないものをあるとせよと。

空に舞う霧とも思える龍たちは、いつも傍にいる。

#### 7. Epilogue

一つの終焉



LENZAN ART Production